



繪本拾遺信長記

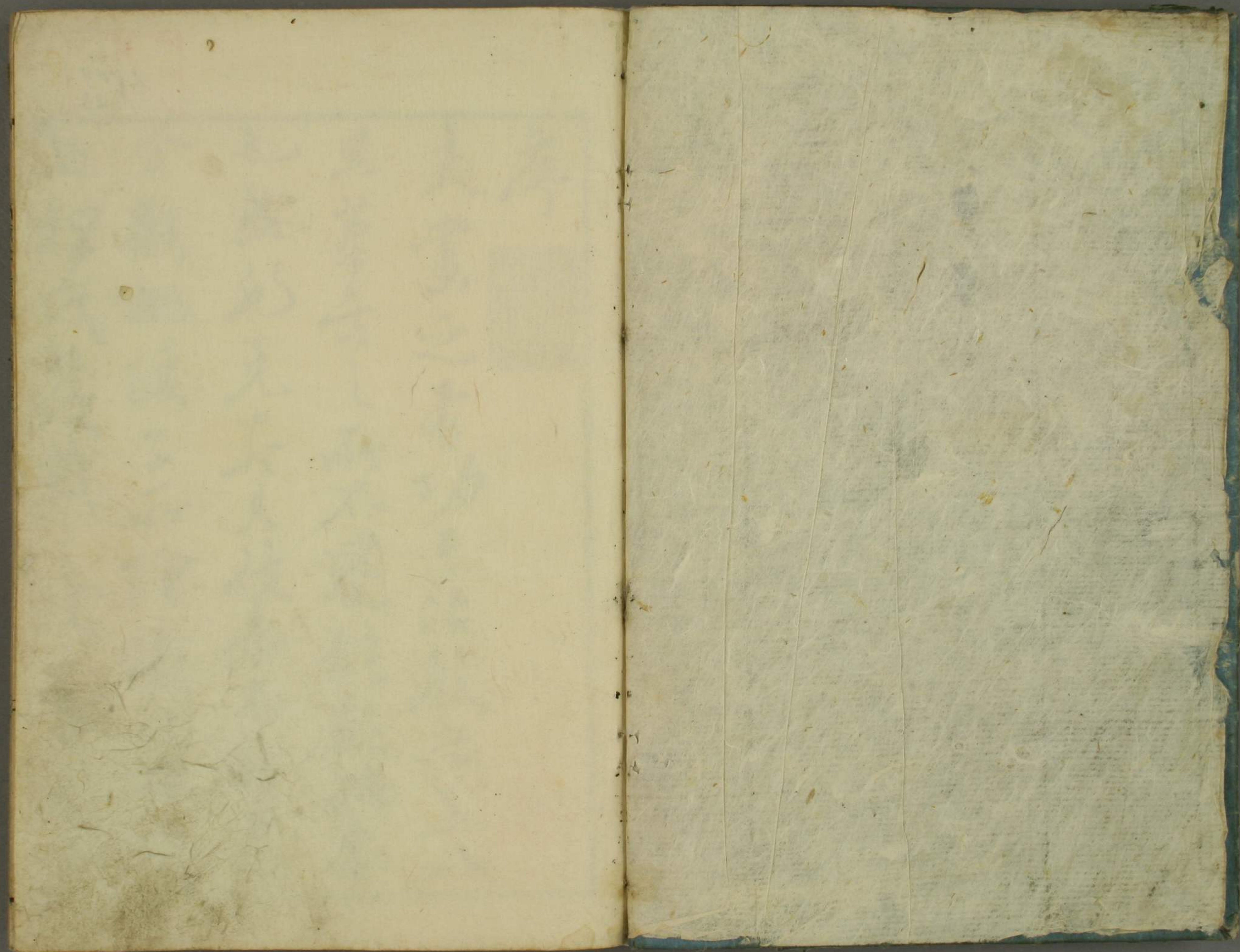
前篇

一

雲

特別
18
2507
1





明遠
號 2507
卷 1-23

序



夫畫之有功于治教者蓋以
具革俗之所不逮能彰法象
也然此克其伎者不能為
今觀桃溪子所繪織田右府
與程氏相攻戰之狀存之在目



其筆下致之妙結全觀其者
動激之意且均中傳述以國字
其存以尚而實有所謂正中之志
至得友之捷徑矣枕溪子嘗
夢遊于閩月其學有例源
矣矣去三月念七日何書中閩月

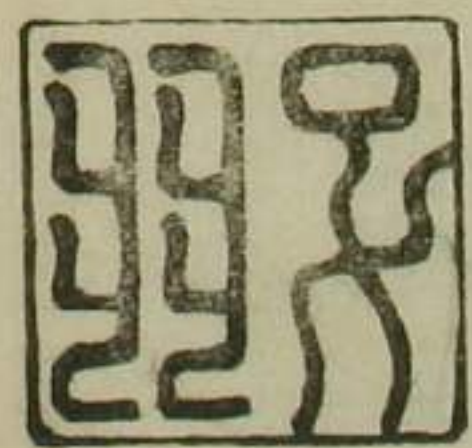
七回這其山生大集于大融寺
而為畫會富進福之之
是日一州生袖法卷末乞序
因書少右余曾撫閩月遺
累而臨未見枕溪子頗以
有因也切即之應其需耳

記其夢之所從云
享和笑矣之暮去

長洲文學梅屋時賜題

并書于泚為宋卷清

夢軒



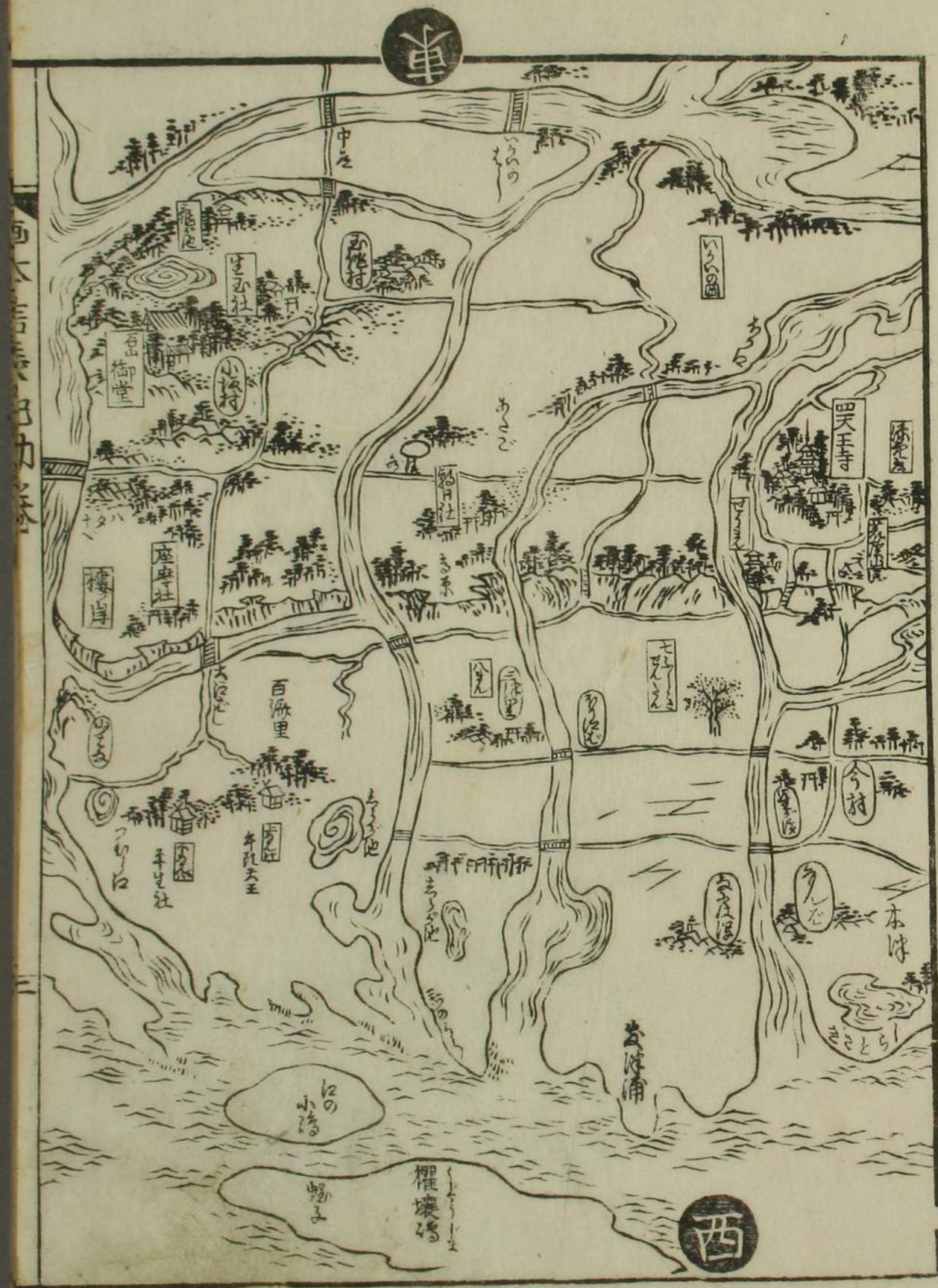
禪系機緣巧計詐術

剔括無遺利害透徹

咄之刺心目只是一段

豁醒

拙古



中古浪華之圖

國本信長言不...

押

位吉明神

國本信長言不...

西

小瀬氏は信長記世小行々事既久一を編中
 關處の老ハ唯石山と校我此一事而已也近頃又
 信長記拾遺ありて京師雜島秋里に著るる本書に
 遺漏を補ふるは之なり今此著や二書を以てひかるに
 童蒙の視易きを要と以即吾邦此國史と謂ふ
 可めや史は著るに所ハ古を新とす勸善懲惡今の所を
 以て小史抑又繪此要るる言の及ぶるを興る者や毎て
 以て全備せりと謂ふし以て兒童を以てこれに讀む
 史を關此楷梯を以て再々以て卷首に附言は

浪華六の書子永樂亭中

繪本拾遺信長記社篇

惣目録

卷之卷

本願寺傳來八代ノ事

山門の衆徒大谷の御坊を奏

淡谷右即九常門蓮如上人と假ひて

三舟寺園滿院近松寺と蓮如上人又附屬と

本願寺高田門徒等強訴

家撰女政親自宮之事

一撰寫家撰女が居城を攻る 日景

二之巻

攝州石山御堂草創之事

蓮如上人石山御堂草創之事

佐々本定頼山科御堂を奏る

下間頼義上人と大坂(傳)の事

斐田の御書拜徳

顯如上人本願寺相義之事

澄如上人御即位の料調進

顯如上人門徒又叙せらるる事

右に兼

本願寺朝倉と婚姻

三好松永等弑義輝之事

畠山大館の二童子を討死

凶徒多争入て室置成棄る

小田信長上洛之事

信長の上洛と怒りて三好の凶徒に圍(為)る

村母不破の両後本願寺又後と

三之巻

本願寺評定之事

令圖を捨松

石山より鈴木重幸と石

本願寺評定

信長攝河内國平均之幸

池田勝政信長と戦ふ

小田勢太龍寺の城と美

本下及右郎軍開金場本願寺幸

及右郎上人を欺く

本願寺より右軍家へ銅錢を献じ

本願寺合戦之幸

三好勢燬の津又勢採入

秀吉奇計三好を破る

室町河所徳貞幼

巳之巻

信長勢州發向之幸

門後の一揆信長の本陣と疾討

信長角力上覧

信長城を攻朝倉幸

信長謙謗の眉首を互る

信長子角が峯の城を夷る

信長攝州發向之幸

毛屋七郎右衛門信長と退討に

三好が一黨押田福徳と砦と搦ふ

石山本願寺門後と集休

鈴木重幸入石山本願寺

鈴木重幸没小田勢

重幸奇計信長勢と欺く

百姓多境を築く

重幸小田勢と水攻に

五之卷

川分口樓岸両砦合戦之事

柴田勝家勇力

勝家敵乃雜兵と拷問に

枕に成政勇戦

攝州石山合戦之事

塚本小次郎討死

信長陣と中將へ移る

小田信長石山本願寺と裏

鈴木孫市勇戦

信長平定へ故交に

森摩意多敵と當る

平理口懐疑之幸

理村彌中守討死之幸

信長級軍明智先秀危難を救ふ

平理口乃希ひ

本願寺刈田

六之卷

上人自吊討死者幸

津丹堤合戦

上人自討死乃者と吊ひ終ふ

朝倉淡丹坂本出張之幸

日圖

秀吉退陣乃計議をみる

信長公攝州退陣之幸

信長長柄川又船橋を掛る

秀吉船橋を崩して三好勢と川中又殺し

佐々牧方合戦ニ系

石山勢級軍之幸

日圖

鈴木重幸荒木村重と戦ふ

秀吉秀吉と吾戦死

七之卷

柴田勝家上京之事

柴田勝家信長を誅云々

宇佐山城合戦之事

日圓

小田信治を討死

信長坂本出張之事

一揆等其地親言寺又籠城云々

秀吉計策一揆を破る

其他親言寺落城

瀧國一向宗門後一揆蜂起之事

小田信興討死

依勅命小田と朝倉浅井和睦之事

勅使江州下向

江州本願寺一揆蜂起之事

二川平左衛門勇力

種又乃城合戦一揆敗軍

八之卷

氏家入道下全討死之事

長治乃一揆信長が降と追討云々

氏家入石ト全討死

弓削修理女勇力討死

信長燒延曆寺事

日圓

宇治橋合戦之事

信長橋乃瀨の城を焚

刀祿坂合戦山崎長門守討死之事

信長大嶽の城を焚落凡

刀祿坂合戦山崎長門守討死

朝倉義景淡舟長政父子生害之事

朝倉義系東雲寺にて生害

城不強勅攝州奉願寺籠城用意之事

不教寺一揆挂田播磨守と殺凡

九之卷

信長再攝州發向之事

信長勅を蒙りて英熟番と切

珍本重幸天王寺乃陣所と籠城

幸幸奇計小田の軍兵と扱びやく凡

光秀軍美味方乃勢を扱く

下辻村助討死之事

小田勢横並八ヶ村又田を別

下辻村の助討死

奉願寺領城系困事

朝倉系鏡恐まじく平泉寺よまへる

平泉寺落城

信長卿長崎一揆退治之事

松の渡合戦

信長欺て門後の百姓を救ひ

十五卷

城系門後等滅亡之事

小田の家臣官位昇進

小田勢風雨を凌いで河津浦へ寄る

高田門後等討下向筑後事

河津落城

重幸奇計破矢岩齋事

小田信長加城の城を夷る

城系の人氏山林に隠る

原田信守討死之事

重幸奇謀欺小田勢事

筑後法橋之命

重幸再小田勢と破る三系

十一之卷

鈴木孫市郎燒天王寺陣所事

鈴木龜舟仍と天王寺の陣兵糧と運ぶ

天王寺合戦

信長即智免重幸鐵丸事

信長放軍

明智細河君所備る

鈴木重幸信長と破る

信長云降國之事

信長智鉄丸を免る

鈴木豊人出難賀事

小田勢川分口の番配

鈴木豊人難賀を出る

信吉乃陣而れ豊人を捕る

十二之卷

鈴木豊人被擒歎事

日圓

異僧孝子を救ふ

豊人有奇怪而到石山幸

日 園

九字名号の奇瑞

九字名号の奇瑞之事

本津乃岩合戦

小林園苑小田の戦いを接

鈴木豊人初陣高名之事

園苑勇戦

豊人小林と戦ふ

霊みて佛款を討む

十三之卷

自本願寺乞於毛利家兵粮事

九字名号豊人が命よかまてせ給

重幸商人を仕立毛利家に兵粮と借る

松永が番兵商人が荷物を改む

石山密使欺松永番兵事

布商人番兵を討る

堺浦より高松と接

石山の使者毛利家に御書を呈

毛利家入兵粮石山幸

川分口の番私室の松若所拓く

重幸計兼川分口の番私を廢登以

川分口私軍之幸

日圖

總目錄終

繪本拾遺信長記初篇卷之三

目錄

本願寺傳來八代之事

山門乃衆徒大谷の村坊を奏る

淡名寺即左衛門運如上人を救ひたり

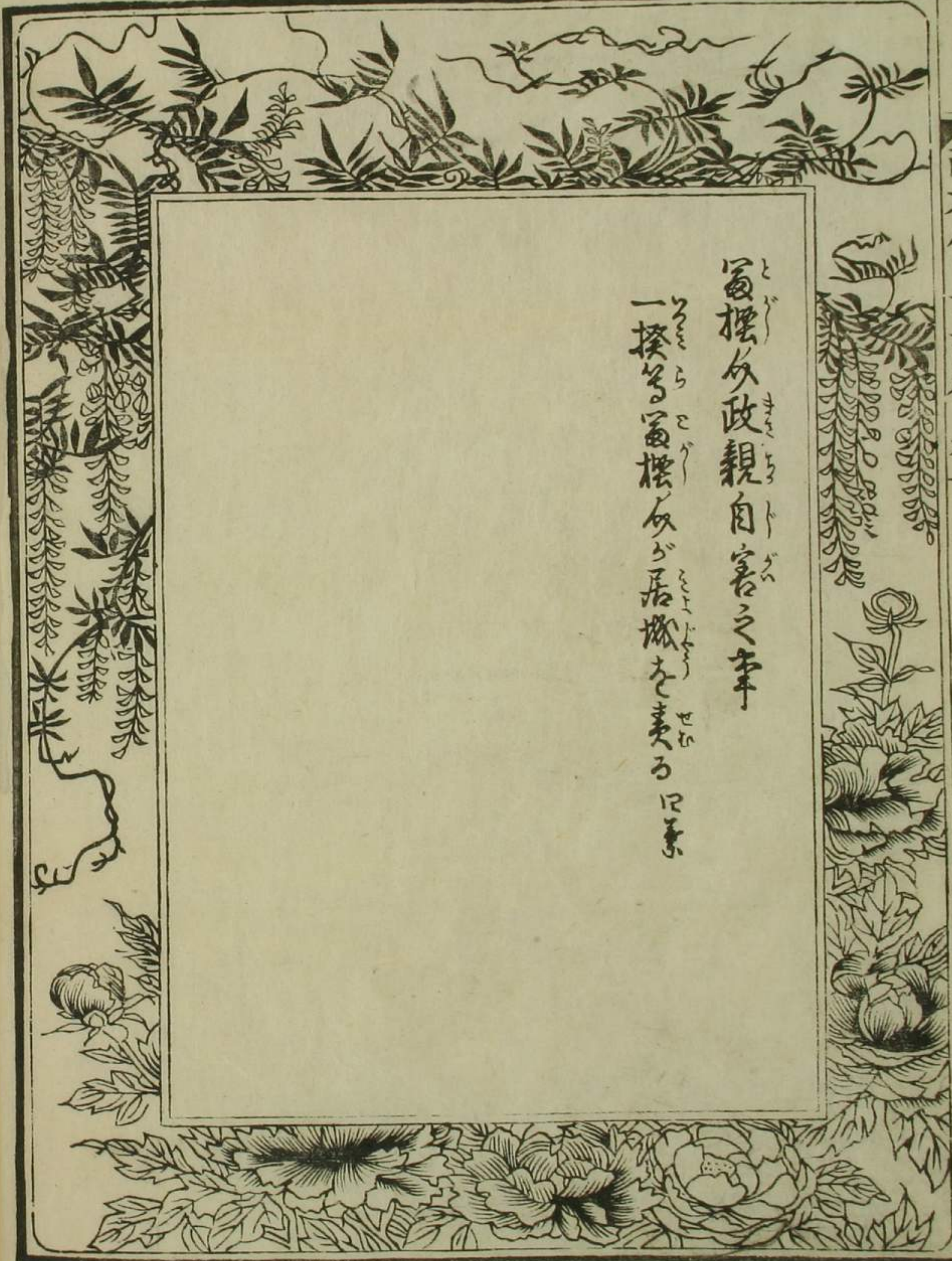
三舟寺因濃院近松寺と運如上人の附屬に

本願寺高田門徒等強討



富樫政親自害之幸

一揆多富樫政親が居城を焚るに幸

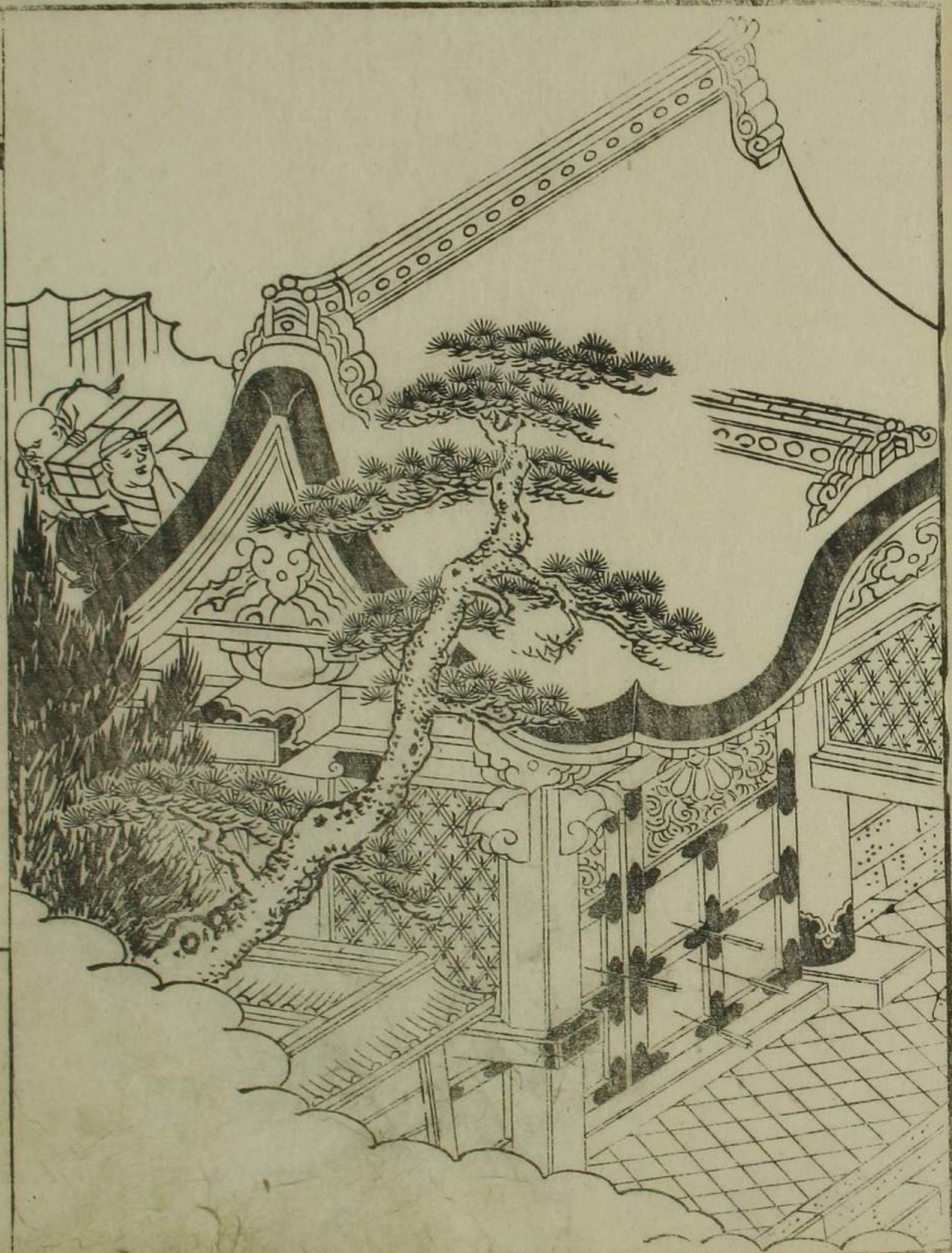


繪本拾遺信長記初篇卷之一

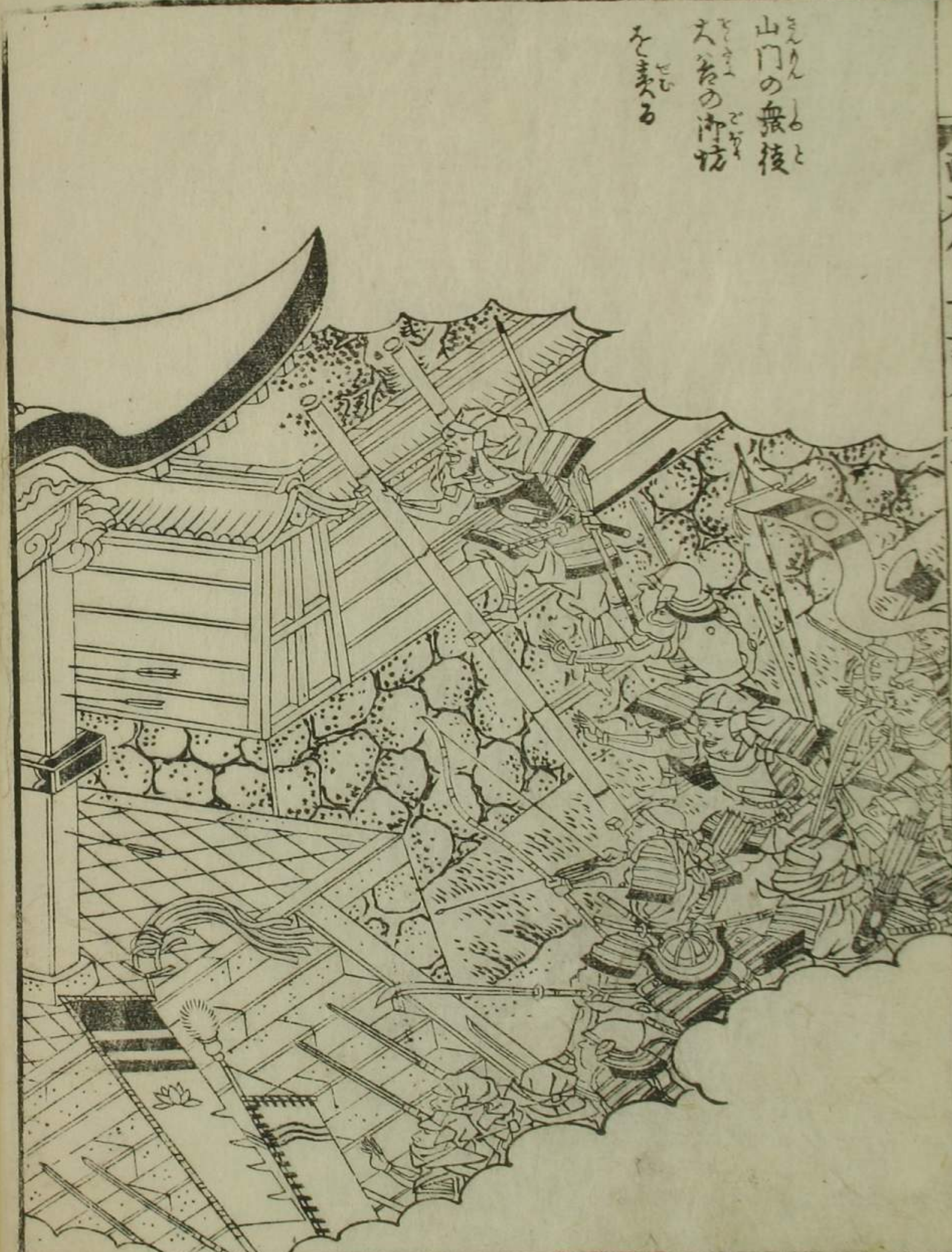
本願寺傳來八代乃幸

本朝人皇百八代正親町院永祿天正の附より小田右大臣平信長とより武田おはしくより志願仁の比より天下麻の如く私道教十年の向治と治とるのる所失より信長云一揆て桶狭間より今川義元と討より武威權勢朝輝のおより向ふ不若て款とる者より每度武田乃強款とに」此年朝倉三好松永等瓜忽と陸」天下の諸候悉く懼ひ懼は霸業既と物るんと民安よ不恩後ありるの摂州赤松郡石山乃地一向宗本親寺と國我十餘年及びびるがに」雄略る信長云軍勢と換」兵卒多し一度に全き勝利と多し此後天正十年六月



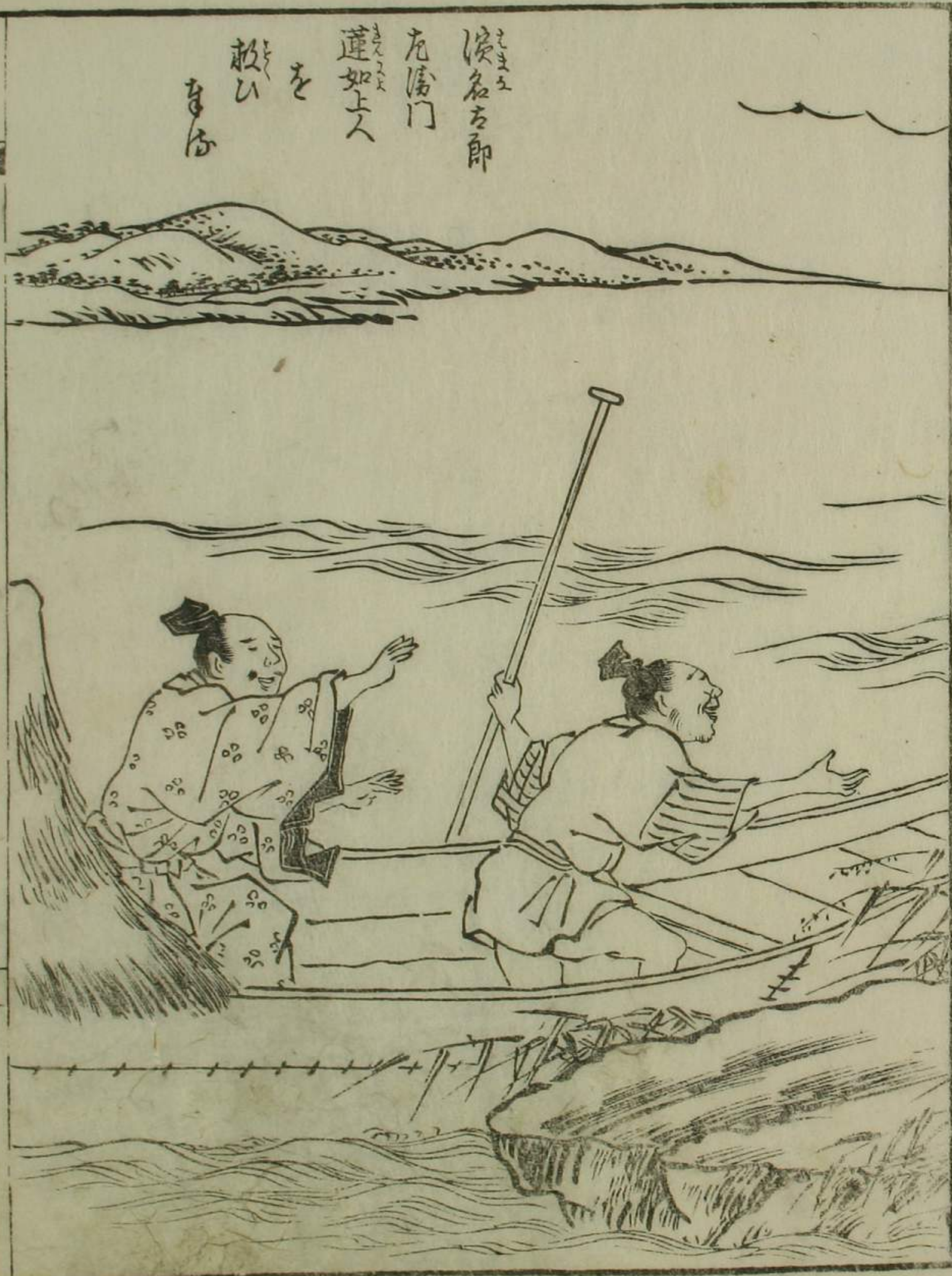


山門の無後
大なる御坊
をまゐる



二日家臣明智光秀がむすむと裁せり空しく幽冥の鬼とあり孫の
 ぬるい滋は地力不親の念佛未代はあても孫家へ又昌一衆生と海
 彦はしまえ如素の御子なりとやと皆人感涙を流しけり
 抑一向宗不親寺の用山親鸞を尊人となすを依り人皇八十八代高倉
 院の御子兼安三年癸巳乃御誕生して小字と若松丸と申し
 又鶴瀧丸と申すなり御父君は天見屋根の苗裔三室戸の
 大進有範御母は徳守府の軍左馬次八幡を即義家御の嫡
 男對馬守義親の女若光女と申すなり鶴瀧丸九歳なりて喜蓮院
 至慈園和尚の御弟子となりて別發まじりて其後叡山の赤塔
 寺勅寺大承院に侍せ給ひ天名の要法を學ひ一念三身の奥義
 と究め盡し終は廿九歳にして都六角寺觀世音の善觀を感じ

赤山吉水なる源空を人の弟子とつらなり地力専念の美門入り
 孫の御名は若信房と号しつらなり建仁元年月輪の兼實公若
 水の禪房に入りて孫の在家修行の先達と云ひ孫はより若信
 河房三十一歳乃御時則月輪殿の御女玉姫と申すは河方と申す婦
 女あり孫の地力不親の命は未代乃九倍又教化し孫は三十二歳
 ありて常陸國に到り禰田と申すに在りて十年同國中圓は三
 年相模國府津に二年日國倉田に三年其外遠き國へと經廻
 ありて御身の憂苦を難と志す修念佛と弘めたまふこと
 元て廿五年貞永元年六十歳にて關東より江州まじり登り孫の
 本郡とらふに六年御時して六十六歳の御時都に歸洛まじりて



日本書紀卷之...
 卷之...
 卷之...



日本書紀卷之...
 卷之...
 卷之...



三年寺密院
近松寺と
蓮如上人
又
附屬
に

山崎闇斎先生著

九

迎り又あびく年月を送り終ひたるふ文明元年大津の僧人
 源名右即九尾門と云ふ者上人を船に乗せ密に大津へ
 送りしがあに歩て奔逸し有りけり即九尾門才覚の男とて三安寺
 の濃徳院へ入り蓮如上人の難儀の次分を物ぐるり御安身乃
 計と頼もろふ元来山門と三安寺のむらじより其間隠じう
 ざれば濃徳院又速得心して園濃院大僧正と計三安寺別本
 の中道松寺と寺名とたよ上人へ進せらるるふ上人甚よろこ
 び終ひ別道松寺に移りはく本寺は祖師の善教と安座三安寺終ひた
 僧せ終ひぬを後文明三年御子蓮後と近松寺の住持と加しとふ
 大津と立出城を圍下向し終ひ吉徳と云ふ所一寺の御寺と
 建立ありて安よ僧せ終ひゆ又奉たりしが上人の近習下同安

蘇蓮宗といふ若が仕業よくけ御寺を忽と退治せり其始終と
 易ろ小云る嘉禄二年親寧上人下野國大内の庄を回と云
 ふ一寺の御寺と建立ありて御弟子善佛房と住持と加
 終ひ是とる田の庄候と云ふ上人遷化の後い小園七州けり田
 善佛房の門後多うりしと蓮如上人吉徳と本寺と建立あり
 より小園悲く上人の化守と稱候し吉徳の御書目録の末信
 引りきり此先より門ぐる回流本親寺流風候別道本親寺流か
 ら親寧上人の御弟子善佛房の用基せしと候守りしが回
 本親寺より流と請りる回より本親寺こそ上人滅後先
 信尼云乃又創あり大谷の本親寺なりといふを先と奉守と
 いふとよに事い止ざりし流と終り國を最權政親一併一是



長吉

洲の別改を執ひて小政親いりてや田流は荷擔して
 本願寺門後を洲改と爲しぬ是は懐て本願寺の門後等と云
 勝り國中の月宗と集り金沢と押よせ最權女と減さんと企て
 たり其門後の中より年若くは眞実の若かりて急き城を去
 の御堂より下間安藝入道蓮宗と附て奉の次第と言ふ
 ありし人より御云系をうけらる門後乃ち終りと定めらるる
 り淨弘もお止し國中の若く男女何の勢ひも是は勝らん急い
 て傳達せりてと中々小元来下間安藝最權女と恨るる
 ありしが心中より是と執ひけし時と失りて最權女を討に我自ら
 加賀國を押しせんと思念と發し上人の御前にかく中々終る
 金沢の最權女國中の御門系と退放し御宗命と永く斷絶

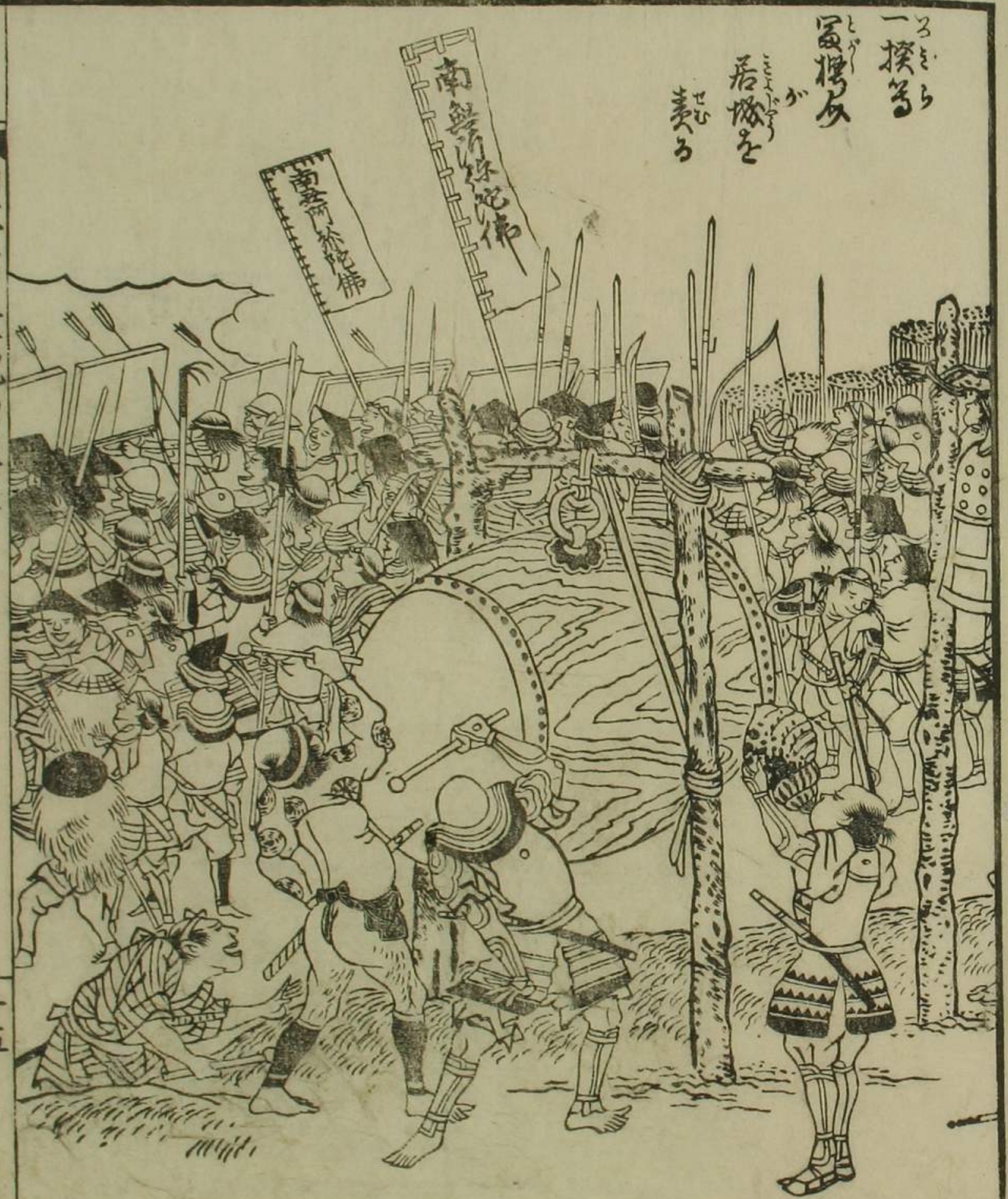
せしんと企る所加賀の門後等一黨し最權女と討たんとは當
 本寺より大お一人下さるべきを執ひ奉りいと激しやふ中々終る
 上人大きに發せられたるは一方よりぬたるや子細と委しく尋問
 せし其後石出よりいと中上げ佛加賀の門後と違ひては女一足と云
 へや最權女といふと中上げ佛加賀の門後と違ひては女一足と云
 く國は淨り近國の門流をかくし合戦の用意と云し當本寺
 よりも大お一人をいさるべき上人の御前と云ひをいれは彼門後大
 き小發せきといひしよりさる上人の御前と云ひて國は淨り
 ぬされ下間安藝の最權女は勝寺等かたらひ自大おとゆりて
 加賀國へ發向せんと其用意と云く之最權女もくもけりて佛堂
 悪き場を承がらるすひるを承りて若傍の御堂へ押寄蓮宗と

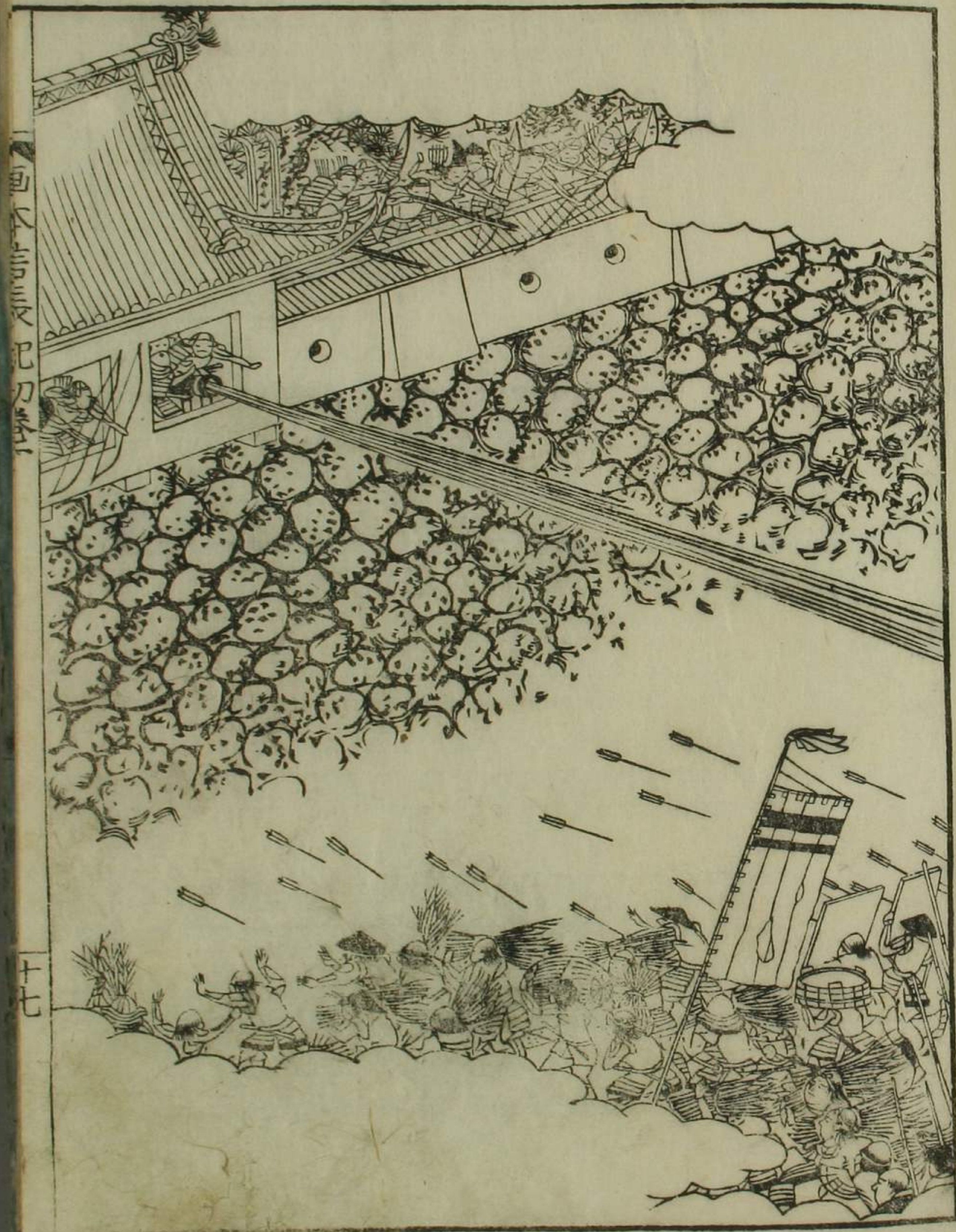
日本信長記初卷一

はじめ寺中の奴一人を誅せ討殺せしむ三百余人の獲と
 後(城)を以て攻めたる所筋の門後等是と見く大さふか
 ぬに我々の若衆の次弟を後進と見く人再
 びせしめし扱し要き安藝が仕業る我元来為斗しけ
 りを知らず事既又安藝よりいんとし詮方は今いし不
 居(り)にししに候は舟より若衆の小次(は)をせしめし討
 文明七年八月廿一日の夜に下向安藝の山に後けぬ
 運よせよあひひ方知しに落したり程なく安藝政親軍
 勢引合し喚き叫んで推考しよと人と始り集りて寺中乃男
 女とぐくを落して人強しえに安藝政親いよく腹を立火を
 けりて寺中と焼燬し安藝政親の領勝寺(は)安藝政親の領
 けりて焼立勝寺といはれて金沢(は)ゆりたり是より加賀能登城を
 ありての中親寺末寺道信の門後勝(は)と候し忽一揆と
 て金沢(は)押よせ安藝政親と合戦殺多し及べし或は討ち或は
 討ち勝願乃をいふなりたり

安藝政親自害之事

安藝政親は安藝今枝大膳といふ浪人あり此世の習ひより
 人と教へ火と教へ悪事とおぼし大なりといふも得る名は後
 又一方と云ふるにけし西人といふと經廻し斬立強盜して毎月
 を送りたりが加賀國中親寺の門後等安藝政親と合戦し及ぶ由
 と安藝政親が急ぎ加賀に來り一揆の内より加賀に終りし堂の魁首と
 ぬり誅罰より下知とぬれは百姓の軍より安藝政親



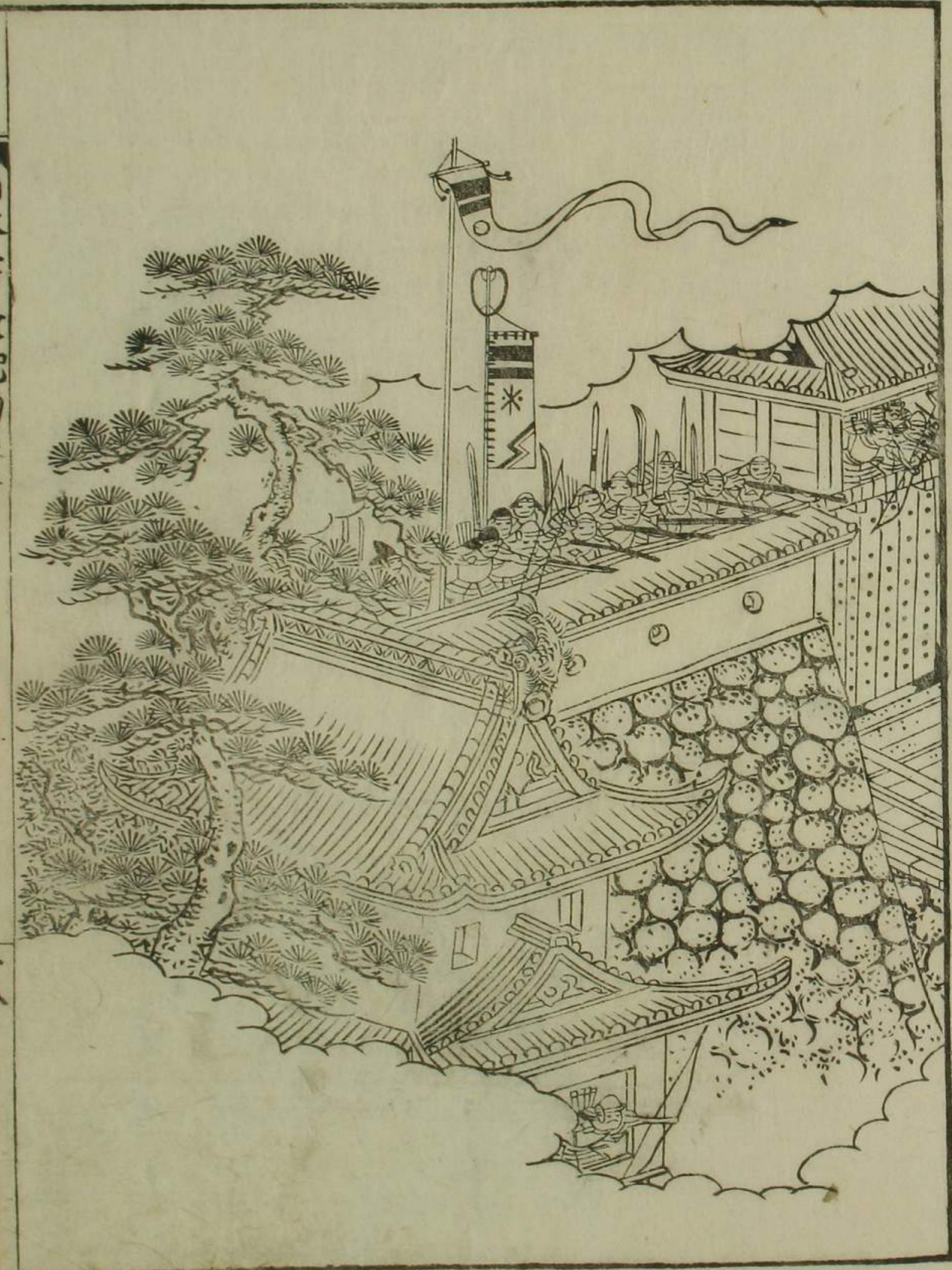


畫不詳記刀

十七

其二





うる際まともも至後の膳と忘とに防戦とるこそはこの勢ひ
 るれいで討て出く死く後合戦とるる腹切也し海船ん
 のいよく為よ供に死せんとあふもの死又海船しとや
 を軍率一日は波をなびいりぐり十代の皇君と見捨何國(逆)
 勢や死し死出の御伏侍んとく海船をいりぐり海船
 女大き小教いゑ秘の酒宴をたじりりる形る不人あふの軍師
 今枝大膳城中の力敵つるを際しとけりぐりみ又百人の道跡と
 法人揃ひの方より押せ埋草と煙の内へ扱入我または飛入く
 掃又急ぞとるるぐりや火を放らく焼立りり海船成を後
 まるひ扱けしりるんが丸乃大門活と用きぐりまた来り一揆
 の中へ又先と掃く切て入東西は難立南少に斬崩(二三度)に

又度掃合しが味方の兵士大討と今いそまどぞと本丸(押入)
 内より火と放ら終り切後して死りりりりは膳切りし次方りり
 源の右大臣頼朝とより加藤三州と海船は船ひ教代守護職お渡
 して武勇の誉とるりりしと宿世の因縁とやあらん去民のぬ小
 滅也し其家承く断絶せり本教寺門後の勢ひかくれく國
 と又攻屠といまして況や郡代を居るんとい物の教とせは志
 たがふ若の幕下と如し敵討者の妻よせて踏崩し心のまうは國郡
 を掃りたるわびにえより一揆たりのりりり其の村に我文死
 けの一郡の某が死かたりとほよ浄論よ及びたりとぞ後日士
 軍又月と書しぬを中より年老て長人しき若の何よりり
 かくてい國中も掃りりり早免の宗右乃るり代えりり國郡

